乳幼児期の育ちと保育を考える
幼児の教育
特集
いま、倉橋と出会う7
「うっかりしている時」
年7月
2010
フレーベル館から新しい月刊保育誌が誕生！

保育ナビ

理事長、園長、副園長、主任など、保育現場をマネジメントするすべての保育者のための月刊保育誌が誕生しました。

文部科学省や厚生労働省の動向など、保育を取りまく政策レベルの話題を含め、これから園の未来を担う保育者にとって必要性の高まる情報を、わかりやすく紹介します。

26×19cm 80ページ 定価950円（税込）

1. 他園の様子がよくわかる
   「特集1」500人アンケート＆座談会
   「特集2」実践報告
   4月号のテーマは「選ばれる園になるために」。
   少子化の中、今後の園のあり方を考えます。
   5月号／「子育て支援」、6月号／「感染症」です。
   その他、「研修のあり方」「評価と政策」「保護者対応」などのテーマを取りあげます。

2. 園経営に直結する情報満載
   《保育コンサル》
   「園経営の扉をひらく！保育マネジメント講座」
   《保育最前線》
   「国の動きを読む！研究者の目」
   《保育アラカルト》
   「ソーシャルワーカーの園支援ノートから」など
   図のマネジメントを考える上で欠かせない「予算」や「人」の管理、行政の動きなどを、《保育コンサル》《保育最前線》《保育アラカルト》のコーナーに分け、わかりやすくお伝えします。

3. グラビアページ
   園の旅 ～伝統園をたずねて
   全国60か所以上の保育風景を撮影してきたカメラマン・渡辺悟が、各地の歴史ある園をたずねます。園舎や子どもたちが生活する姿から、園の歩みが感じ取れます。
   4月号は、お茶の水女子大学附属幼稚園です。

年間購読

「保育ナビ」を1年間お買い物いただいた場合
は、年間購読をおおすすめ致します。
詳しくは、下記までお問い合わせください。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括宮 (03) 5395-6608にお問い合わせください。
幼児の教育
目次

● 巻頭言 ●
子どもと大人の「共生」を考える — 身体性の視点
根ヶ山光一

● 特集 ●
いま、倉橋と出会う フ「うっかりしている時」

実践の中で味わう 槇田正子
「うっかりしている時」から教わった幼児教育の魅力 杉原 徹
「うっかりしている時」とチャンスの訪れ 石塚美穂子

● 保育の創意工夫 7 ●
園庭の土山 前原 寛

● 幼稚園の源流を求める旅 森有礼の第二次在米時代（5）●
アメリカでの新たな出会い 国吉 栄

4
8
9
12
18
24
28
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>作者/著者</th>
<th>ページ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>園のくらしを育む 4</td>
<td>秋田喜代美</td>
<td>32</td>
</tr>
<tr>
<td>幼児とアート（2）—ものとアート—</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>絵本で子離れ（2）</td>
<td>松井るり子</td>
<td>36</td>
</tr>
<tr>
<td>脱皮と追い風</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>「豊田英樹と草創期の幼稚園教育」の出版まで</td>
<td>前村 晃</td>
<td>42</td>
</tr>
<tr>
<td>保育の現場から</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>居場所になるということ</td>
<td>伊集院理子</td>
<td>46</td>
</tr>
<tr>
<td>アフリカの学力調査からわかること</td>
<td>佐々木真千子</td>
<td>52</td>
</tr>
<tr>
<td>お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み（43）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>日常性から保育カリキュラムを考える（1）</td>
<td>宮里暁美</td>
<td>58</td>
</tr>
<tr>
<td>附属幼稚園『しけのみパーティー』の姿から</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
子どもと大人の「共生」を考える

身体性の視点

根ケ山光一

子どもには、未熟で非力というイメージがあります。無力な子ども像は、大人による保護や導きを必要とする子ども像でもあります。最近の子どもをめぐる事件、事故の報道などを見ると、そういった子ども観が強まっているような気がします。

子どもが母親のお腹の中で育つ時、母親はしばしばの間その存在に気づきません。それにもかかわらず、子宮壁への着床、胎盤の形成とそれに続く栄養や酸素の受け渡しなどがとり交わされ、子どもと母親の身体の間では、ある種の「コミュニケーション」がなされます。また、出産や哺乳についても、そこには免疫、代謝、生理的仕組みに基づく複雑な現象が含まれています。そこで、子どもは確かに、ある意味未熟で大人の助けが必要としています。しかし、考え方を変えるならば、子どもは自らの生存のために、そのような大人を操作してその資源を引き出す絶大な「能力」をもっている存在であるともいえます。大人に受動的に育ててももらう存
在ではなく、大人に動的に働きかけ、大人に資源を注がせる存在として子どもを見ることができます。しかも大人は、様々な方法で自分の資源を提供するのです。大人
と子どもの「共生」関係とは、そういう対等性をさして言っています。その対等性の基
盤として身体性があるということなのです。

子どもが大人から資源や何かを引がいを引き出す能力を全身にたたえているということは、見方を変えれば、子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えまして。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるとのこと
を考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるうこと
考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるということを考えます。子どもが大人の育児行動の教師であり「ガイド」であるところを人間は、子どもで育てるとも同じようにソフトと過ぎていきました。親は子ども

翻訳ものです。
もという最も信頼性の高い「デキスト」を横に置いていて、文字どおりの『育児書』や「医師のアドバイス」などに頼り過ぎてはいないでしょうか？そこではしばしば、『愛』や『きずな』の大切さが訴えられます。愛とは、関係の心理的側面です。発達心理学でよく言われる『意図』の理解や『心の理論』も心理面に関することで、それは年月の経過を伴う子どもの成長に応じて発達していくとされています。そこには、未熟な子どもが、成熟した大人に導かれ発達を遂げていく、というイメージです。ここには、リーダーとしての親の役割がますますに考えられます。しかし、子どもの身体にたとえられている生物性は本来自己主張的ですので、親の身体にある生物性と対等な相補的関係にあります。未熟な子どもが、成熟した大人に導かれ発達を遂げていく、というイメージです。それは西洋の個人主義と相性のいい考えです。さらに、どういった選択や、選択の方法、選択の内容、選択の効果に含まれる身体の積極性が、全体に存在しています。西洋の個人主義の発達も、日本で伝統的に受け継がれてきた、子どもの主体性を尊重する育児にないものとらえ方の必要ではないでしょうか。
（詳細な解説や表記を含む内容）
いま、倉橋と出会う7

倉橋専三（八八二一—九五五）は、子供と保育研究の先駆者であり、日本の幼敎法を長く務めた。彼は、幼敎における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に《幼稚園雑草》と《就学前の教育》などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を務めた。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生まれた研究者、保育者のエピソードを紹介する。

うっかりしている時

その人の味はうっかりしている時に出る。

教育の一番ほんとうのところは、普段、その人のちりと味によって行なわれる。まして、相手が、説明をした後、もっとほしい意味で始終うっかりしている育児たちである場合、我々のうっかりは、いつもある言葉、うっかりする動作、出あいがしらに、うっかりと見せる顔、その時出た、わざやあら味をつけるとして、うっかりしている時の全くなにも、くつろぎに過ぎよう。そこでこそ、保育教育はもっとかかるものと、昔今も変えるのである。
実践の中で味わう

「その人の味はうっかりしている時に出る」と冒頭にあり、「最もいい意味で始終うっか
りしている幼児たち」とうっかりしている時が、如何に教育的に大切でたらきをなして
いるかと続くこの文章を、今回私は実践の中で味わってみたいと思った。「うっかりし
ている」状況はどういうものであろうか。

また私は、常々、保育者が園の教育理念など大切にしていていることをきちんと理解し共有
した上で、それぞれのもち味を生かして保育をしてほしいと願い、それを言いもし、期待
もしてきた。なぜなら、保育者が生き生きとその人らしくいるところであれば、子どもた
ちもまた、生き生きと自らを充分に発揮するであろうし、そこに充実した保育実践が生ま
れるに違いないと、漠然と思っていたからである。さらに、私が今日まで出会った多くの
先輩や同僚がそれぞれに豊かなもち味で保育する中で、子どもたちがのびのびと健やかな
育ちの姿を表しているのを目撃したりし、その心地よさを感じてきたからでもある。
さて今回、倉橋の文章に向き合って繰り返し読んでいるうちに、これまで漠然と感じて
きた「もち味」への関心が、にわかに大きく、さまざまな考える機会となった。もち
味はまさに固有のものであるから、その中身については、ひと言で言えるものではないが、かといって何でもよいとも思えない。考えていくと、保育の場における効果が考えられる。それはありそうに思われる。その場所は「教育の一環は、子供の目がまわるためのもの」に関与する可能性を有するものである。他方「うっかりしている」はどう考えられるであろう。こんな場面が思い浮かんだ。

その予定されていることを準備するためには、子どもたちと一緒にホールの大型積木を片づけていた時のことである。誰か私の背中に飛びついてきた。片づけることに気持ちがいった。妻か？

と肩に回された小さな腕をとっとと外して振り向くとA男が笑ったりした。瞬間的に思い出したのは、その日の登園時。門の所で子どもを一人ひとり出迎えていた私の横。「おはようございます」と言って通り抜けようとした時、一歩後ろに足を踏み込んだのが、タイミングを追い切った母親に大声で呼び止められ、「A男、ごあいさつはちゃんと先生の目を見せて下さい」と言われた。A男はとっさに母のほうを振り向いて立ち止まったものの、タイミングを逃し、気持ちが向けられない様子でそのまま戻った。A男の笑みをたたえた目を見ただけで、朝以来のA男との気持ちがぴったり合うのには感動を覚え、あの時のことがあったという思いがして、A男の肩を抱いた。
保育の場において子どもの思いに寄り添うことを考えていながら、保育者の気持ちが
その日の予定や伝えるべき事柄にとらわれていた、本当の子どもの気持ちが気づけずにい
る時がある。先の場面でも、予定の流れに合わせて率先して片づける姿を前面に出す
おりであり、側面や背後への気配りが抜け、うっかり“素の私”が出ていたのである。うっ
かりではあったが幸いなことに、その“素の私”の雰囲気は子どもたちと過ごす日ごろの
ものであって、違和感を感じさせるものではなく、むしろ親しみを感じさせたようであ
る。だからこそA男は背中に飛びつくことができたのである。さらに考えれば、率先し
て片づけることに余念がない保育者の前線の姿には、A男が思いを込めて飛びつくことの
できる余地も心地よさも見いだせなかったのでなかろうか。特別な経過や期待で特徴づ
けられるものではない。率直さと親しみが醸し出される日常的な雰囲気こそ、その時々の
子どもがありのままの思いがそのままに受け止められる余地を有するのであろう。
このように考えにいたって、私は保育者のうっかりした部分と、そこに生ずる教育の
意味あいが結びついた感じがした。
そして最後にもう一度想起したいのが、うっかりした時に垣間見える保育者のもち味の
在りようである。前述したように“共に在ることを喜びとする感覚”を基準として、率直
さや親しみやすさなどの表現が浮かんできたが、さらにそれらを包み込む“溫かさ”を忘
れてはならないと、いま強く感じている。
大学院で教育哲学を専攻していた私が、ご縁あってて保育者を養成する短期大学に勤務するようになっ
て、はや四年目になります。いままで養成校での
生活に慣れたとはいえますが、当初は驚くことばかり
でした。

教育上のことでは、何といいつつもカリキュラムの
過密さです。一年生ならばほとんど五時間授業です。

研究上のこのことでも驚きがありました。幼児教育分
野では、実践研究が圧倒的多数を占めているのです。

杉原 徹

「うっかりしている時」から教わった

幼児教育の魅力

そして学外実習の多さ。二年生は六月に幼稚園（四
週間、八〜九月に施設（二日間）、十一月に保育所
と比べて、また実習に出かけるような印象です。
考えれば、実習に出かけるような実験が必要なものです。幼児教育の

文献講読が基本ですから、幼稚園や保育所に出かけ
て幼児を観察・記録したり、保育者からアンケート
をとったりというスタイルが主流であることに当初

- 12 -
戸惑ったものだ。

ところで、幼児教育の世界に入ることによる私

との間の発展の機会が多かったということかも知れません。幼

児園に学生を連れて出かけることがありました。

が、学生以上に私が子どもたちとののかわりを楽し

んでいるような気がします。学生を放っておいて、

子どもたちのかわりを楽しみながら、一方で

幼児教育の難しさを感じます。言葉の獲得、 kako

がはしたび次のような指導していくのか。学生たちに

する幼児をどのように指導していくのか。学生たちに

は小さい子どもたちの心を違えるか、言葉で

のことを強いて身近にしつつ使っています。子どもの

世界で日々奮闘している私です。


K君の「うっかり」

倉橋高生の「うっかりしている時」を、ある学生

と一時的に読みました。何かアイデアが欲しい時に、

学生の力を借りると思わぬ収穫が得られるというこ

とは養成校の勤務で学んだ教訓です。実際に、今回も

大きな収穫が得られました。日ごろからよく話を

している男子学生K君を研究

室に呼び、手始めにK君に実習中の「うっかり」と

呼び間違えについて話してくれました。すると、彼は子どもの名前の

呼び間違えについて話をしてくれました。クラスの名前をまだらう覚えで、ある女の

子の名前を呼び間違えてしまいました。クラス全員


- 13 -
「うっかり」

K君は「うっかり」をマイナスのものとして認識しているようですね。確かに、一般的に「うっかり」とは、マイナスをイメージさせるでしょう。なぜなら、僕は「うっかり」は本意ではないからです。

その人の味は「うっかり」している時に出る。この人のもち味とはいえない。

...我々の「うっかり」している時が、如何に教育的・科学的に大切なklädingをなしていないかは考えられる以上のであります。

ここでK君に、「うっかり」している時のコピーを渡し、倉橋のこうした文章に触れてもらいました。彼に話し合いを願う。

K君はよくとんとしています。彼には思いもよらない

「うっかり」理解がそこにはあったようですね。
ところが、トウモロコシのところで・・・子どもたちは正しく答えてくれたんですが、僕はつい「そうですね、トウモロコシはだれですか」と言っちゃったんでしました。そうしたら、子どもたちは大爆笑。次から、『タマネギ』とか。絵を描く時も、パイナップルの絵の横にわざわざ『パッションフルーツ』と書いていたんだって。でたらめ言葉を楽しむ活動になったような。でも、僕の言い間違いが波紋を呼んで、活動が盛り上がったような気もあるから、これは倉橋のいう「うっかり」と、実はおそらくエピソードです。K君はだからな、言葉を気にしているようですが、本来の名前を正確に覚えていけるからこそ可能になるわけだし、パッションフルーツと書いた子が本当にそのように覚えているのならですね。活動を盛り上げるきっかけを作ったK君の言い間違いは、倉橋の文脈における「うっかり」の「教育的に大切なのはたらき」などといえるのは気楽さゆえのことであっただろうから、養成校の教員が「教育的に大切なんだから」ということになってしまってしまうものだろうか。そう考えると、何となく不安になってしまいました。

保育者のコメント

さらに翌日、K君にもう一度来てもらって聞きました。K君は、にやりとして話してくれました。「それでですね・・・僕が言い間違いをして、でたらめ言葉が飛び交うことになった時、僕はかなり慌ててしまったのですが、ふと先生を見るとき、ニコニコして。
されていたんです。ちょっと不気味で、反省会で何を言わせるかなあ、とドキドキしていました。反省会の時間がきて、先生がいつものように「今日はどうでしたか？」と聞いてきたので、「今日の設定保育はよかったのか悪かったのか、複雑な気分です」と答えました。そうしたらその先生、何て言ったか思い出します。「あれでいいのよ。子どもたちすごく楽しんでたでしょ」と。「緊張が一気にほれましたよ」。

K君の話を聞いて、不思議に解消されつつしたのはいつまでもありませんが、私にとっては興味深かったのです。K君によれば、クラス経営の先生は次のように言ったそうです。「K先生が言い間違えた時、どんな顔してたか覚えていますか？顔をゆがめて「やっちゃった」という表情だったよ。子どもたちはそこもあおりかかったよ。」

わよ。保育者があって二十年以上経つけれど、そういうことはしようっちゃう。ちょっとゆるいじゃないか、かもしれないんだけど......でも、信じられない。言う間違えないんだけど......です。それでも、信じられない。

私が言う間違えないんだけど、うまくいかないんだけど、いつ起こるかわからないし、防ごうと思っても防げないな。防ぐことがわかるより、防ぐことは意識せず、その時その時、言う間違えをする。言う間違えを防ごうとは意識せず、その時はその時で切って、とにかく楽しんで保育していようと思えるの。
実習生K君への語りからじみました「うっちゃり」への思い。「その人のもち味」として、「教育的に大切」として、「会話」をかけてしました。

「うっちゃり」にについて、もしそう考え続けてみたといいます。

（高知学園短期大学講師）

注
参考文献
1 杉原徹（本学幼児教育学科における実習指導の課題）
杉原徹（小島・久） 『保育者養成校と附属幼稚園の連携のあり方に関する研究』 教育実習事前指導重点化のための試みを通して 同前 P. 55
2 教育学研究 第40号 二〇〇〇年 P. 45
3 矢野智司（意味が躍動する生とは何か） 世織書房 二〇〇六年
「うっかりしている時」とチャンスの訪れ

石塚美穂子

「先生、大変！」

･･･と落ち込むこともたびたびありました。
そんな私がここまです育を続けてこられたのは、子どもたちや周囲の大人たちなど、たくさんの支えがありましたからだと思います。そのことが私の心の支えとなり、日々の活動となっているのです。

以前勤めていた幼稚園で、年長組の担任をしてい
た時のことです。男児Rが虫探しに夢中になってしま
た時です。私は、Rがどんな表情で戻ってくるか、楽

･･･と落ち込むこともたびたびありました。
そんな私がここまです育を続けてこられたのは、子どもたちや周囲の大人たちなど、たくさんの支えがありましたからだと思います。そのことがある心の支えとなり、日々の活動となっているのです。

以前勤めていた幼稚園で、年長組の担任をしてい
た時のことです。男児Rが虫探しに夢中になってしま
た時です。私は、Rがどんな表情で戻ってくるか、楽
みんな気持ちで見守っていました。

しばらく経ち、「 sagen」い！ カマキリ見つけた！ バッタもいたよ。自分で捕まえたの、すごいでしょ」と、それは満足した表情で見せにきてく

れる！ いた！ お帰りの時間よ！ と園庭で遊んでいたら

よい！ 一人懸命探したから大事に飼いたいのよね。お帰り

の時に、みんなに相談してみましょう」と話すと、

にっこり笑い、うれしそうに庭へ駆けていきました。

その後、「お帰りの時間よ」と園庭で遊んでいた

子どもたちを呼びに行った時、Rが焦った様子で虫

かごを持ってきました。

先生、大変！ バッタが食べられちゃってる……」

残酷なことに、ムジャマジャと食べる音も聴こえ

ました。同じ虫かごに、この三匹がいたら、食べら

れてしまうことは予想がつきますが、私は当時、R

にどうかかわろうか、どんな言葉をかけようかとい

うことに一所懸命で、先のことまで考えが及ばず、

このような事態を招いてしまいました。

Rが虫を見せにきてくれた時、私はほかの子ども

を向けることは難しいと思っていました。それでも、

喜ぶ気持ちには応えたいと、その場で言葉をかけ、

私たちに精いっぱいの心を伝えつもりでした。

しかし、忙しさにかまけて新しい虫かごを用意す

のを忘れ、バッタの命を奪ってしまったので、後悔

の気持ちが残りました。

クラスの子どもたちが、うわさを聞きつけ集まって集

まれてきました。代わる代わる虫かごの中のそい

ています。

「あっ、カマキリが、バッタを食べてるよ」

「カマキリは良い奴だ」

など、感じたことを思い思いに口にする子どもたち

ですが、
友達になってうれしいな

だから、子どもたちに助けられたように思います。そうして、思いもよらないところでチャンスは訪れてくるのです。

友達になってうれしいな
見えるかな、いろいろ期待をし、誇いかかえますが、
Kは、近づいて頭をなでてくれることはあっても、
それ以上のことはありませんでした。また、Sもそ
れほど追うことはありませんでした。出会える機会
を増やそうと意図をもっていましたが、この時は、
互いに求めていなかったのではないかと思います。

ごしたいという思いだけで、○歳児クラスは大学構
内の広場に散歩に行くことにしました。ほかのクラス
内の子どもたちが同じ場所に行くかどうかは考えず、
いずれのクラスが行く場所を事前に確認し合うこ
とになりました。目的によっては、散歩に行く場所
を同じにしたり、あえて違う場所に変更したり、と
さまざまです。

天気のよい、ある日のことです。外で心地よく過

<CR>

― 21 ―
クラス担任もその場
で、子ども同士が求める瞬間があったのに、見えていなかった
分の思いが先走っていたために、見えていなかった
のではないかと思いました。

保育室でも、異年齢のクラスと、いつでも緩やか
に行き来ができる。このような重なり合う環境が
あることで、子どもも大人も、人との出会いを楽し
みながら、ゆっくりとした気持ちで過ごしていける
のです。偶然と必然、この両方が絡み合う中で、保育は行
われています。そのどこかで確実に、子どもたち
も、人との出会いや、人と気持ちが通い合えるよう
な、いろんなチャンスが訪れています。子どもたち
も、みんなが影響し合い、育っています。幼稚園
の人たちも笑顔で手を振り、こちらに向けてくるの
でも、ふれあいにつながっていくことが
気づかせてもらうことのありだと

子どもたちも笑顔で手を振り、こちらに向けてくるの
でも、ふれあいにつながっていくことが
の事例は、まきしく、子どもたちのふれあいがあっ
て、それに支えられつつ、成り立った保育だと思
います。

ナーサリーの事例では、出会いのチャンスを用意
したことは計画でした。しかし、保育をしていく
と、実際の子どもの姿との間にズレが生じ、計画と
おりには進みません。このことに気づき、計画に縛
られずに、いまの子どもの姿を大事に保育をしてい
くことが、子どもと保育者の安定した生活につな
がっていくのではないでしょうか。

倉橋先生の「うっかりしている時」の教えには、
いたろうか、保育者としてのかわりはどうだろう
たのだろうかと、振り返ることを大切にしたいと
思っています。

私はまだまだ到達していませんが、思いがけない
チャンスの訪れがあり、そこから保育が発展し、新
しい発見ができましたことは、私にとって、大きな一
歩だったと感じています。

子どもと向き合い、子どもに寄り添う保育を大切
にし、その日、その場に訪れたチャンスをしっかりと
受け止めることのできる保育者でありたいと思い
ます。

お茶の水女子大学いずみナーサリー

注
SとKは月齢が近いのですが、入園した時期が異な
ること、保育室の数、広さの関係でクラスが別にな
りました。
梅雨が明けると強い日差しが照りつけ、夏本番を迎えます。子どもが泥んこになって遊び回る季節です。

私のかかわっている保育園は遠営地域にありますが、園庭はさほど広くありません。そこで運動会をするのですか」と驚かれるほどの狭さです。

ですから、季節ごとに遊具の配置などを変化させ、狭い園庭を有効に活用する工夫をしています。運動会を行うために、九月から十月にかけて園庭は起伏のない状態になりますが、それ以外の時期は多少起伏があっても問題はありません。園庭は起伏があるのですから、こうした状態は避けて通れないのです。
います。ご土山の土は硬いのに、表面がつるつるしていて滑りやすく、抜いていくのに苦労します。かといって、すぐ崩れてしまうようでは、おもしろさが半減し
いえとともに盛ります。

土山をどのように使って遊ぶかは、子どもに任されます。駆け上ったり駆け
下ったり、三輪車で勢いよく滑り降りたりしています。よく遊びを始めた
小さな子どもたちにとっては、ちょっとした山登りになります。その土山は
が格好の土遊びも提供してくれます。土山での遊びに子どもは飽きることが
ありません。そんな中で、おもしろいなと思ったことがありました。土山をつくったら、
子どもたちが火口のような状態になりました。何となく桜島に似ています。子どもたち
で身近に親しんでいる山の形があるんだ、と思うことでした。

土山をつくられる時期は決まっていますが、夏に必ずといっていいほど、園
庭にあります。暑い時期の土山は、最もいい遊び環境になりますから。
ただし、つくる場所がある場所でないと、土山での遊びは発展しません。
ある年の土山の位置は、例年よりも退いていました。梅雨が明け、夏本番を迎えると、
待ってましたとばかりにギリギリした日差しに逆流します。位置がずれた土
山は日差しの中にある、とても日中にも遊べるような状態ではありませんでした。

夏場の直射日光の当たるところでの活動は、日射病や熱射病などの危険があ
ります。日差しを避けするために、園庭には樹齢数十年になる木が何本か植えら
れています。桜やセンダンなどの落ち葉樹に、夏には濃い木陰がつくっています。園
庭の半分以上が覆われますので、子どもたちの戸外活動は、もっぱら木陰で行
われています。

園舎は開放的なつくりになっているので、クーラーは装置されていません。どん
な暑くて扇風機を動かすぐらいです。クーラーを使わないのには理由があ
ります。クーラーが作動してると、部屋が閉め切られてしまいます。子ども
も、冷えても快適な空間があれば、そこから出ようとはしなくなり、室内に閉じて
もちろん、子どもが屋外遊びが激減しています。そこで、子どものもとで事態を避けるに従って、クーラーを使わないようにしているのです。

鹿児島でクーラーが無いと暑いのでは、と思われるかもしれませんが。しかしそし建物が開放的であり、庭園に木陰が広がっているので、真夏でもクーラーは必要ありません。例年、土山は木陰につくからもう少し涼しが感じられる。

例年、土山は木陰につくために配慮していたのですが、その年は日照が差し込む所につくってしまったために、土山での遊びが活発化しませんでした。遊び具であれも移動させることもできますが、さすがに土山は動かせません。環境構成としての土山の成長について反省することでした。

そんな年もありました。毎年夏の間は、土山を使った活発な遊びが展開されています。そのような年もあります。子ども一歩がダイナミックになるに伴って、土山は崩れて小さくなっていきます。そして、九月の中旬にはすっかり Pharmacene 運動会に持ち上げられる状態になっています。

庭園の様相を変える土山の存在は、夏の子どもたちが遊びに来なくてはならないもの

（鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長）
幼稚園の源流を求める旅
森有礼の第二次在米時代（5）

アメリカでの新たな出会い

ワシントン就任まで

二〇〇六年（平成十八年）、ワシントンに到着した私は、ホテルに荷物を置き、周辺の地図をもらってM街に向かった。日本外交使館があった場所である。森有礼が館員たちと学生下宿のようになっていたという外交使館。

現在の、すべてが整ったところに赴任するのとはまった違う。何もないところから始まる外交官の生活。森と同時期に鰐島尚信が欧州に派遣されていた。米欧で日本の外交を拓いた二人が、共にハリスに忠誠を誓って帰国の人物であったことは興味深い。鰐島は派遣先が歴史と伝統を誇るヨーロッパであったため、新米外交官として森以上に苦労した。その彼を顧問として助けたのは、薩摩藩留学生をハリスに誘引した英国貴族オリヴァー・ファントの友人であった。森の場合はどうだったのだろうか。

それらにしても森の外交官時代の人脈には目を広げることがある。まだ造営中だった新興人工都市ワシントンを
本拠地に、どのようにあれども人脈をつくったのか。
いや、人脈などという即物的な語はふさわしくない、心から協力者をつくったのか。
で、日本弁務使館があった場所には、コーヒーのチェーン店、スターバックスが出していた。
M街に面したカウンターに座ってコーヒーを飲み、ほんやり通りを眺めながら、
彼のここまでの道のりを思い浮かべた。
私がどうしてでも気になっていたのは、彼がワシントンDCに居た時期までであった。
当時エリール湖畔のブロックトンにあったハリスのコロニーには、英国から渡った六人の学生のうち、
三人のほかは、森自身が連れていった、あるいは同行を依頼された者たちで、身分や立場は異なるものの、大き
く括れれば米国で学ぶことを志す留学生たちであった。ハリ
ツはコロニー内に日本人のための学校を開く準備に取
り掛かる。ところが、手紙がコロニー内に届いたのである。二週間前はどちら
に行けなくなかった、と知らせる電報である。
森はなぜ予定を変更したのか、東海岸に出る前に留学
生を引き連れてブロックトンに行こうというのでは、旅のルートとしてには自然であるが、外交官として赴任する途上の
行動としては異様である。予定の変更は当然であろう。
しかしこれまでの私のささやかな森研究から考えて、私
には、彼が自身自身でそうしようと決めていた重要な予
定を、さしたる理由もなく変更するとはどうしても思え
ならない。
キツネレ文書の発見

長い間考えあぐねていた私であったが、先年に私は森研究の新たな資料群を見いだした。日邦領事ブルークスの友人であり奴隷解放論者であった、ボストンの実業家のキツネレ関係文書である。それによって私は、森が急きょ予定を変更した理由を知った。森は西海岸から同行したブルークスに、大陸横断の車中、日本における信教の自由の実現と国民の教育にかける強い思いを語ったのです。ブルークスは森に心酔し、ボストンに飛んじますよう友人を紹介します。彼は近くなき名士が出席し、全面的に森に協力を約束した。キツネレは森の求めに応じ、これからの渡米でくる日本人をボストンの公立学校に入学させることが約束し、近くの名士が出席し、全面的に森に協力を約束した。キツネレは森の求めに応じて、これからの渡米でくる日本人をボストンの公立学校に入学させることが約束し、会合を終えたブルークスと森は、その日の夕刻ワシントンへと戻っていった。ワシントンで諸用務を済ませたのち、森は属官一人と留学生二人を伴ってプロクトンを訪問した。プロクトンに四泊し、留学生をハリスに託すと、森はその足で再びボストンに向かった。
取引も直さず、彼がハリスから得た機会のために裏付けられた明確な目的をもっていたからにはならない。逆に、森の第2次来米時代におけるハリスの影響を相対的に減じさせることになったのである。大陆横断通上の予定変更は、森にとっては、わが国にとっても、重要な転機であった。終生ハリスの忠実な徒であった森がアメリカ到着直後にこの新たな出会いを得たことであろう。思いがけない重要な資料の発見であった。

プロテクトンを辞して再びボストンに向かった森が最初にしたことは、のちに同志社を創設する新島襄との面会であった。面会の場を整えたのもキンズレーであった。ドーヴァー神学校で日本への宣教師となるべく学んでいた。森は後日、外務省に新島の国外脱出の罪を申し立て、海外留学免許を渡されたい旨を申し立て、新島に日本に来帰する。
園のくらしを育む
幼児とアート(2)
—ものとアート—

秋田喜代美

1 紙テープの世界

保育園や幼稚園を訪問させていただくと、自然に心が弾んでくるのを感じます。それは、子どもたちのみずみずしい遊びや、くらしの柔らかさに、喜びや驚きを感じるからです。そして、そこから知的な発見やひらめきがその場で生まれてくるからです。それらの中には、知識を膨らませてくれる経験と、これまでにはなかった見方を与えてくれる経験があります。後者のために、言葉の意味を改めてふかっていくことがあるように思います。

昨年九月、東京大学大学院対象保育園の研修の関係で、アメリカのハーバード大学附属の六つの保育園を視察訪問しました。その時に出会った園での実践とその記録が、これ
までの私には充分になかった見方を与えてくれました。ビーバッド・テラス
という保育園は、乳児が描いたなぐり描きやフィンガー向けがていねいに額縁に入れて飾られている。写真やメッセージの宝庫でした。子どもたちへの保育者の真摯なまなざしが映し出される中で、保育の真摯なものを感じました。子どもたちの記録を長期間にわたり、それを振り返って実践のレポートなどを書いておられました。保育者は書いた一つ一つのレポートが、保育学や教育学の古典的文献に関する教養に支えられ関連付けて深く考えられていましたので、私は帰国後に何度もそのレポートを読み返しました。このような経験は、日本の保育者の実践記録では感じたことがないものでした。

その一つに、紙テープの実践記録があります。五歳の男の子が色鉛筆で長い線をずっと引くと書いていました。彼は周りを見渡して、棚にあった巻いてある黄色の紙テープを見つけていました。そして、画用紙の上に線を引くのでなく、その紙テープを長く延ばしていきます。すると周りの友達もすぐにこの子の考えに気づき、端を持ってあげます。どんく延ばしていくと廊下の端から端まで届きました。またほかの子が別の色の紙テープを持ち出し始めます。子どもたちが紙テープを使ってよいか保育者に了解を求めた時に、一度にこんなに使ってよいのかという思いが保育者の頭を瞬にぎりぎりです。けれども、使用を肯定的に認めています。そこからさまざまな遊びが始まります。いろいろな色の紙テープを延ばしていくと、どれぐらいあるのかどうかと長さを考える子どもたちに言葉をしましょう。
どもが出てきます。それらの紙テープを一緒に集めようということから、紙テープがこ
んがらがり丸まってしまっています。それを子どもたちは「チームボール」と呼び始めます。そ
に、園のほかの年齢へもさまざまに活動が広がっていくことで、物語は続きます。実際
の実践記録ではなく、英語を日本語にした上にかいつまんでご紹介しているので、生
き感が伝わらないかもしれないのが事実として残念なところです。

2 人工物・ツール・サイン

紙テープは、本来、人がある必要性から考え出したものです。この意味で人工物アー
ティファクトです。飾る、縫取るなど、さまざまな意味をもって形成されたもので
す。それを子どもたちは廊下の長さを測る道具としても発展させています。これは紙テープの本来の
意味ではありませんが、子どもが考え出したツール道具だということができます。

そして子どもたちはそこから、チームボールというものを偶然にして作り出し、新たな
意味を子どもたち自身でつくったり、そこでチームボール、遊びの世界で意味をもつサイン（兆表）
として機能します。このように子ども
のも、先達の使い方を学んだと同時に、それを新たな道具として使ったり、またそ
のまでの見方や機能を離れたりすることにより、自分自身の新たなサイン、自らある固有的
意味世界をつくり出すことができます。そしてそれを仲間と共共有し広げていくこともし
ています。これこそがアートであり、遊びの醍醐味になっていくだろうと思われます。

同じ一つのものがその意味や質をどのように変えていくのかを、この保育者は見つめて
大事に記録にとり、そしてものにかかわる理論をもとにして論じていくのです。実践の中
にはいろいろなものが記録されます。決められたことを決められたとおりに使うのでは
なく、それがどのように一人の子どもの中で意味を膨らませていくのか、意味の世界が
膨らむことで子どもたちの経験の質が深まる過程を描いていっています。

先日、東大本郷駅近くで保育園で二歳児が仲間と絵を描いているところを撮影したビデ
オをカンファレンスで見ました。赤でリンゴを描いてから中を黄色に塗り、黄色いリン
ゴと言っています。皮だけが赤いことをこの子はわかって、丸いリンゴの中を黄色にし
ています。その後を見ながら「リンゴシャキシャキ」と言って食べまるねをし、「ぐるぐ
る線を描くうちにリンゴは線路になってゆき、シュッシュッ」と声を出して描いてい
ます。と、その子はその画用紙を立ててその後ろにクレヨンの箱を置き、ガタンゴ
トーン、ガタンゴトーン」と言いつつも身体表現を交えて机の上で画用紙列車を動かし始め
ました。こうした姿はこの年齢にはよくあることです。しかし、描く道具としての画用紙がサ
インとしての列車に変化して行く瞬間でした。もの量がたくさんのあることが豊かなる
ではなく、ものへのかかわりの質を経験していくことが豊かな経験であり、子ど
ものアートを生み出すのではないでしょうか。

（東京大学大学院教授）
脱皮と追い風

自分の中から自分が生まれる

お金好きな王様と、ドレス好きなお姫に、念願の男の子が生まれてみると、ロバででした。王子は人間の服を着させて教育を受けましたが、いつも独りぼっちでした。ロバは揺さめて苦労してリュートを習い、両親のために歌をくって捧げると、「大変よいか、私は忙しい」と追い払われます。王道を越えて、はるか遠い世界の果てへと続く。

松井るり子

長いすすまいの間に、美しい自然の音を自在に奏でられるようになった王子が、たどり着いた城でうっとりしたり、笑いころげたりしました。しばらくして、王女の花嫁候補の王子たちの来訪があると聞くと、ロバの王子は城を去ることにしました。別れの歌に泣きだした王女を「僕がいなくなっ
とても、歌は思い出せる」と語ると、王女は「歌よ
りもあなたが好き」と言って、地団駄を踏みました。
するとロバの皮が脫げて、つり下し王さんが立ってい
ました。王女は「そんなことなら、初めから知って
いた」と言いました。
バーバ・クーニーの描くグリム童話「ロバのお
うじ」(「ほるふ出版」)には、このように描かれます。

この王子様の場合、親に着せられていた立派な服
は、ロバの姿を隠すためのものでした。親を見限っ
た後は服を脱いで、ロバに戻って家を出ました。そ
の姿のままで、好不容易に受け入れられた時、ロバの
皮が脱げて人間になり、結婚しました。最初の脱皮
は、親と親にまつわるこまるかしを脱ぎ捨てる形でな
され、二度目の脱皮は、自分と自分の出生にまつわ
る因縁を脱ぎ捨てる形でなされました。どちらも、
痛かったと思います。王子は、「よくやられました。
子どもが、着慣れた皮の中に隠された、次のス
テージの自分を誕生させようとする時、まずは内か
ら爪を開けて、引き破ります。それから、皮をは
捨てなければならない。それらは、子どもたちが進めてゆく時、親の
目には、これまでせっかく与えてやったよい物を、
捨てがたいものです。
腹が立ちます。怒るのも大人げないので、夫と二人
して「いま、この子は「はんこ置き（反抗期）
術のオヤジギャグ」だからね」「仕方ないね」「ま
だだだなんだ」と、さもかかったような顔をして、
本人の前でうなずき合ってやるのでした。

王は無用の皮を焼く

魅力的な大人の絵本です。この絵本の中では、
リディア・ポストマ絵「グリム童話集」（ウィル
ム・菊江訳、西村書店）の「ロバの王子」は、
王女の話口に忠実に、王女はロバの姿のままの王子
と、夫にします。婚礼の夜に父王は「ロバの王子が
いつものように礼儀正しくふるまうか、心配
に
を、こんな感じです（右の挿絵参照）。
四つのシーンに分けて、モノクロで描かれる夜
は、ロバがリュートを置く。ベッド脇に立つ姫が、白
いドレスを脱ごうとしている。
王子がロバの皮を頭から脱ぎなぐる。姫はシーノックを遠慮して携帯電話で「こんにちはできた」と
メールしてやるような配慮さえ裏目に出てしまわない私
は、確信に満ちたこの父親が、うらやましいです。

このとき、王様はきっと相当の権力者で、その権力を使
に行使してきた人なのでしょう。

「おふくろ」を再び着用しないように焼き捨てるので
ころが、「まさに出産だと思いまし」。脱ぎ捨てた
皮の破れ目から、ふるばた顔で王子が出たと
という願いに突き動かされている子どもにとって
も、明日までずっとやってきたロバとしての振る舞
いを明日も続けるほうが楽なのか決めています。

だからこそ、焼き捨てるほど過激な、ロバの皮との
決別が必要だったのでしょう。

息子にとっては「おふくろ不要」の時期がきたこと
を、少し頭に考えてみることにします。
「拒否」から「むずっとかむ」まで

姫は世界じゅうを見渡す12の窓のついた塔をもっ

たちを、はねつけるだけでは飽き足らず、一の
私」に求婚してきた身の程知らずの罰として、殺さ
ねば満足しない姫が、お話の中にはたくさんおいで
です。相手の身分が高いという客観など、説得力に
なりません。この私の主観にイエスと言わせたごら
ん、というわけです。大勢の男たちが、自分のせい
で死んでゆくとの残酷に、気づこうとしません。

出久根育が絵を描いたグリム童話、「あめふら
レール」（パロル舎）の、絵の中にコロンと転がる不思
議な数字、これは何？と考えてみれば、おおそう
だ、ストラクスのよねえと思う思いを巡らせば、いや現実世界もグロでは負けておらんわ、と気がつ
くのでした。
たのでしよう。殺してくれる男を寄せ付けない齧姦症
の姫を妻にしたこの若者の勝因は、冷静ならば決
して触れない、ぬるべったとした生き物を、姫本人の
素手でつかむよう、仕向かったところだと思いま
す。その時の生々しい感じを、読み手に想像させること
で、さらに考え過ぎた方向への想像力をもたくまし
くさせてくれます。この若者は、99人の男を殺した
姫など、ほんとに欲しいのでしょうか？
欲しいの
ででしょう。『失敗者リスト』が長いほど、成功者
の達成感と勝利感は大きいのでしょう。王子たちの
権力欲をあおり立てる魔性の姫ぎみ、恐るべきで
す。

自分の子が『魔性』にフラフープとなりかけて
いる時、あんたが99の死体の一つになるのは明らか
だから、やめと小さく言ってやったりなりますが、
言いて聞くわけありませんよね。最初の成功はな
る可能性に、望みをかけると決めて『われこそ
れするか』と、言いたいのは何より、平凡な願望の言葉も浮かばず、ただひ
たすらかわいそうでした。せめて『発表を見に行く
な』などという追い風を、吹かなければ\n
要するに私は何かの役にも立たなかったわけです
が、いつかはわが子も本当に必要なものを、むんず
と自分の手でつかむまで成長してくれることと、期
待しています。

（文筆業）
「豊田英雄」との出会い

すべては運命的な出会いから

前村晃

二〇〇〇年春、高橋清孝氏、野川氏、清水陽子の三先生と私（執筆者代表）は、建物社より『豊田英雄と草創期の幼稚園教育』を出版いたしました。それなりに苦労はしましたが、運命的な出会いが幾つか重なって、出版できました。باحث

大学の創設時に読書教員として抜擢され、翌年、同校附属幼稚園が開設されると、同園の教育にも携わることになりました。同園で豊田英雄と近藤源は日ごし、幼稚園保育『教論』となったのです。しかしその当時、幼稚園教育についてはは、桑田親五訳の『幼稚園教育』をさかのぼることののように、豊田らは保育の具体的な方法はほとんど知らないまま幼稚園教育を開始しています。
一旦、幸せな国では、フレーベル主義保育を学んだのだという。ドイツ人女性が保育士として働いたので、豊田らは、クララが英語で講義し、それを監事（園長）の関係者が通訳するという形で、幼稚園教育の「伝習」を受けけることができました。

私が『豊田英雄』と出会ったのは、いまから二十年前、早稲田大学に編入した直後です。私は、教育の基礎である幼児教育の歴史から調べ始めました。周辺の人々であることを知り、豊田らとフレーベル主義保育の導入期の関係を調べることになりました。豊田英雄の前半生は波乱に満ちています。豊田英雄の三番目の幼稚園を開設したことも、豊田に対する個人的な関心を高めることになりました。

生まれた時の水戸藩は沖立、抗争の絶えなかった所ですが、豊田の夫、勤王開国派の小太郎は京都で同藩の者に暗殺されているのです。豊田が偉いのでは、志半ばでは亡くなっただけの遺志を継ごうと決心をし、学問研鑽を積み、東京女子師範学校の教師とし、こうした悲劇を耐え抜いた豊田が、幼い命を育むフレーベルの保育をどう受容し定着させていったのかを知りたくて、私は大学の卒業論文のテーマを
研究の足跡

豊田英雄に関する研究はその後も継続し、水戸、京都、田原坂（豊田の実兄、桑原力太郎陸軍少佐は西南戦争で戦死しています）、鹿児島など関係の地を繰り返し訪れました。豊田英雄の二回目の墓参りをした折には、当時、小学校低学年で、現在は私立大学でドイツ語の非常勤講師をしている娘に「パはどうしてお墓ばかり見て歩くの」と聞かれて苦った。しかし、優秀論文として「九八八（昭和63年三月の早稲田大学哲学会誌『フィロソフィア』に掲載されております）、私の卒業論文は、主査の大槻健先生はじめ諸先生方から過分にほめられ、「小野澤賞（小野沢は早稲田大学創立者の一人）に推薦する予定だったが君の卒業が未確定だったので取りやめた」と言われました。しかし、この研究の鍵は豊田の講義ノート「代紳録」にあると思われ、水戸方面でこれを探し続けました。見いだすことことができなかったのです。

最高の出会い

私は二〇〇六年四月から二〇〇八年三月まで、佐賀大学文化教育学部附属小学校の校長を併任しました。その際、同じく佐賀大学附属幼稚園の園長をもっておられた西種子田弘芳先生と出会う機会がありました。先生から「先日、豊田英雄の子孫の高橋清貴さんから話を聞いた。当時の資料が残っているようであったよ」という、私にとっても驚きの情報がもたらされたのです。もちろん、高橋先生にはすぐに連絡を取りました。
保育の原点を見る

明治初期の豊田らの保育理解は、実はびっくりするほど現代的です。子どもの成長を植物の成長に似らえ、子どもの個性と発達に応じた保育を唱えています。また、行為（遊び）による保育を基本としています。

(佐賀大学教授)
保育の現場から

居場所になるということ

伊集院理子

子どもたちは、家庭から一歩を踏み出して、同年代の友達との集団生活を幼稚園・保育所で初めて体験します。昨年度、久々に三歳児の子どもたちが一緒になったという一歩を踏み出す過程にじっくりつき合ってきました。新学期の子どもたちは、母親が帰ろうとするとき、固まって動こうとしなかったり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだしたり、泣きはしなくても石のように固まって泣きだたり。園での生活を重ねる中で、園の環境が、だいにどのように子どもたちの場所に変わっていきましょうか？園の環境を自分の居場所として受け止めていくようになり返ってみようと思います。
たちも増えています。そこで思い切って、周

りにいる子どもたちを誘って囲いの高台のほうまで
出かけていこうことにしました。私たちの囲いは、起

まず、三歳の子どもたちにとっては、おやまと呼んでい
ます。自分たちが群がっている状況の中でも、おや

ますが、自分の背丈の四分の一ほどを上るには、
すべての力を集中させ

一つ、一歩進んでいかなければならない。うっ

かせる。自分の背丈の四分の一ほどを上るには、
すべての力を集中させ

早く終えると、ぼっと視界が

開けます。明るい光に満ちた雑草園が目に飛び込む

に、だいぶ遠くに見えている子どもたちが、毎日出かける前

に、大好きな遊びに行くのを手に持ったり、おんぶし

れない、手提げかばんにお気に入りのものを持って

たったり、自分を守ってくるあたりがあらゆるもので身

を固めての遠出となりました。

「おやま」に着くと、子どもたちは、それぞれで身を

守ってくれた数々のものを次々と私に渡して、駆け

greso:es。私は、こざを敷いて、子どもたちから

預かったものを置いて、子どもたちと一緒に動くよ

にしています。「おやま」には、雑草園だけで

はなく、さらに高くそびえ立つログハウスや築山が

ありです。雑草園を走り回って元気が出できた子ど

もたちは、ログハウス登りに向かいました。一段
一段おっかなびっくり登っていく子どもたちの後に、ついで私も登りました。ロゲハウスの上は狭い場所で、そこで座ると、必然的にそばにいる友達、教師の存在を身近に感じる機会になりました。ロゲハウスから見下ろすと、「おやま」が一望できました。「おやま」で遊んでいる年長児、年中児の様子もよく見え、また声を出すことも、子どもたちの体の中から力引き出してくらされました。

「やっぷー」と声をかけると、子どもたちの足取をいっしょにし、登りつつ、雑草の上を登ったり、体の力を使って力抜きもしてきました。ロゲハウスから少し離れた場所にこごを敷き、私はこごに座って、子どもたちの様子を見守ることになりました。すると、子どもたちの姿が見守ることになりました。
弁当の後、食休みに本を数冊読みていると、おやまと行こうという声が上がり、何人もの子どもたちがそそくさと靴を履き替え、おやまと向かおうとされていた。「早く、行こう」と子どもたちにせかされながらも、私は準備がまだできない子どもの手助けをしていただけたので、すぐに動きたくない状況でびれを切らして、何人が「おやまと」への階段を駆け上っていきました。「おやまと」に続く階段道は幾つもあり、それぞれでの「おやまと通い」の経験から、自分がいる保育室に戻る一番の近道を子どもたちはわかっていた。こちらも何度か出かける準備が整い、子どもたちと一緒に走っていたところ、一人の子どもが階段のたもとにある橋のそで、ダンゴムシを見つけ、その場で立ち止まりました。私もそれに気づき、そこで子どもたちがまた近道を走り下りていったので、私は橋の所で子どもたちがまた近道を走り下り、先に走っていた子どもたちがまた近道を走り下り、私自身、体を動かすことが大好きで、とにかく子どもたちと走る、登る、跳ぶ、踊る、何でも一緒に楽しくことをモットーにこれまで保育で過ごしてきました。久しぶりに三歳児との生活にとっびがされることがたびたびありました。
そんな体験が重なっていた時、津守真先生と津守
房江先生の対談を本にした『出会いの保育学』の
次の一文が私の目をとらえました。
（津守房江）……私は、移動することによってぐ
るっと回ってまた戻って来る循環性が大事なのだ
と思います。外に行ってしまった元に戻ってくるという
存在のものが根底にあっての能動性だと思われます。
愛されて受け止められるだけではなくて、移動に
によって自分の場所があることを自分から把握するこ
とによって存在感がさらに確認できるのではないか。

私は自分で勝手に、子どもたちの「存在感」とい
うのは、落ち着きのある場所があってそこで安定して過
ごす、じっくり過ごすなど、一か所にとどまることが
で導き出されるものだと思い込んでいたようです。
子どもたちの姿とこの一文から、「存在感」とは、
子どもたちを感じる場所があっってそこで安定して過ご
す、じっくり過ごすなど、一か所にとどまることが
で導き出されるものだと思い込んでいたようです。
子どもたちの姿とこの一文から、「存在感」とは、

私は自分で勝手に、子どもたちの「存在感」とい
うのは、落ち着きのある場所があってそこで安定して過
ごす、じっくり過ごすなど、一か所にとどまることが
で導き出されるものだと思い込んでいたようです。
子どもたちの姿とこの一文から、「存在感」とは、

そもそも子どもたちの姿とこの一文から、「存在感」とは、

戻っていく、その動きを自分から取り戻し続けていく
ことを通じて確かなものになっていくのだろうと考え
たまることだけではなく、移動して元の場所に

どちりをくぐる逃げ回ったりしていました。さらに、

鬼ごっこのようなにして追いかけかけ、三歳の子ど
もたちはよく、保育室の斜め前にある桜の老木の周
りをぐぐる逃げ回ったりしていました。さらに、

元気が出てくると、園庭中央の花壇の所まで逃げて
いき、今度は花壇の周りをぐぐる逃げ回ってしま
い。循環という動きを意識的にしている子どもたちの
行動を見つめてみると、本当にいろいろな所で循
環する動きをしていることに気づかされます。ついに
回りたくなるような変化のある園庭が子どもたちの

よくよく考えみてみると、一学期の間、毎日のよう
心できる空間、一人でいることも人と交わることもできる。自分から出て行ってまた戻ることができる場所です。そこにいる人を信頼できるとき、自分の存在が確かなものです。その中で子どもは成長することができます。

だからこそ、出会いの保育学から引用させていただきました。

ここで、再度、『出会いの保育学』から引用させていただきました。

引用文献
津守真・津守房江
『出会いの保育学』
この子と出会ったときから

なおの水女子大学附属幼稚園

ならなみ書房 二〇〇八年

- 51 -
五十音の教え手

サンデー☆デビュー

1912年

昭和元年

3月29日

春日局

五号館

419.4x595.3
大陸の南東部、北はケニアから南編の南アフリカ共和国までの14か国です。アフリカ一一人当たりの国民所得は、中所得国セーシェルの19.5ドルから、0.40ドルのマラウィまで、50倍近い開きがあります。これは近隣にありながら大きな差のように見えますが、もしアジアで同じような調査をしたとすれば、一日一人当たりの国民所得が100ドル近い日本のような高所得国から、やはり一日1ドル前後の国まであるという結果になります。それから考えれば、50倍近い開きもあるほどの大きな差ではないというのではありませんでしょうか。

一日20ドル近い国では、ほぼ全ての家庭に電気が通り、テレビも九割がたの家庭にある一方で、一日1ドル前後の国では、大まかにいって、電気の通っている家庭が約二割、水道が
二割程度、屋根に雨を防ぐシートのある家庭は少なく、光源はろうそくやランプという生活です。なぜ国産・観光などの資源をお持ち、政治の安定した国が経済力が高くなっています。では、国経済力が高ければ、子どもの学力は高いのでしょうか。ここが興味深いところでですが、普通に考えてそれが教育にお金を多く使うことができれば、それは経済力がよくなるのではないかでしょうか。そこで分析を行ってみると、意外なことがわかります。経済力が7位、10位、13位の国が成績ではそれぞれ2位、3位、7位と躍進している一方で、経済力が3位、5位の国々で成績は8位、12位と後退しているのです。これは子どもの貧富の差が大きく、家庭の経済格差が、そのまま子どもたちの成績の格差を反映しています。一方で、経済力が3位、8位の国々は家家とも貧しい家庭の子どもの成績の差が小さいのです。

上のグラフからわかるように、南アフリカ共和国の経済力は10位に比べて、成績は8位。そのための「生活水準」と「学力」の二つの折れ線グラフの傾きが並行です。これに対して、下のグラフのケニア（経済力は10位）を学力の成績が2位では、地方ごとの「生活水準」よりも「学力」の折れ線グラフの傾きが緩やかです。しかも、ケニアは貧富の差が南アフリカ共和国よりも大きいのです。
南アフリカ共和国
地方ごとの生活水準と学力

ケニア
地方ごとの生活水準と学力
成績の差が小さい国があるのは一体なぜでしょうか。
この理由を探るために、子どもの成績と、何かの要因との関係を細かく見ていくことにしました。たとえば、教師の特徴（成績、学歴、年齢、経験、教え方、人数など）、教科書（図書館、テープレコーダーなど）の機材やトイレの数など、家で公用語を話すかなど、行政の支援（視察官やアドバイザーの訪問頻度と内容など）と成績の関係を調べてきました。教師の成績がよくても子どもの成績はむしろ低い場合があります。教科書や学校の設備、文房具などは、無意義に成績のよい国にはあたらないほうがよいのです。無くてでも成績のよい国はありません。電化製品はあちこち、電気・水道が無くても成績のよい国はありません。でも成績のよい国はあります。では、何が成績をよくし、ても成績のよい国はあります。では、何が成績をよくするか、それは、私の分析では、”家庭の関心”でした。”家庭の関心”というのとは、子どもと、学校でやっていたことを聞く、習ったことを生活の中で使ってほしいことを聞いたり、習ったことを生活の中で使っている、子どもが普通である英語を話すことも、電気が普及していても、公用語である英語を話す家庭であっても、教育への”関心”がなければ子どもは成績は伸びてこないです。とは、この”家庭の関心”はどこからくるかというと、実は親の学歴と関係があります。この”家庭の関心”が高いというわけではありません。ごく Adolescent で、学歴の高い親の子どもは学歴が高くなるという再生産が考えられるかもしれません。ところが、学歴が高いほど”家庭の関心”が高いというわけではありません。ごく Adolescent で、学歴の高い親の子どもは学歴が高くなるという再生産が考えられるかもしれません。ところが、学歴が高いほど”家庭の関心”が高いというわけではありません。ごく Adolescent で、学歴の高い親の子どもは学歴が高くなるという再生産が考えられるかもしれません。ところが、学歴が高いほど”家庭の関心”が高いというわけではありません。ごく Adolescent で、学歴の高い親の子どもは学歴が高くなるという再生産が考えられるかもしれません。ところが、学歴が高いほど”家庭の関心”が高いというわけではありません。ごく Adolescent で、学歴の高い親の子どもは学歴が高くなるという再生産が考えられるかもしれません。ところが、学歴が高いほど”家庭の関心”が高いというわけではありません。
日常性から保育カリキュラムを考える（1）

附属幼稚園「しいのみパーぺティー」の姿から

宮里 晃美

お茶の水女子大学・幼保・大・連携保育研究の試み（43）

お茶の水女子大学の保育プロジェクトの「幼保」は、
「幼・保」の共同性を学部学生の教育において育てようという
目的と、そこからひいては各園の日常的な保育カリキュラム
をよりよいものにしていく関係性が育まれるように
という願いが二重に込められていた。しかし、このプロ
ジェクトが始まった三年半ほど前にはまだ、この「幼保」
は構想であり仮説に過ぎなかった。

しかし、「共同」が「協働」になるというプロセスとは
軽くもっていた。園庭をはさんで隣り合う幼稚園とナーサリ
サリーの子どもたちの出会いも、その中で自然に（と見え
る仕方で）起こった。幼保が深い体験として出て
会う協働の姿が、それぞれのカリキュラムの中に無理なく
位置づけてきた。今回は幼稚園・来月はナーサリーからの
報告である。

（プロジェクトリーダー）
浜口 順子
子どもたちの声から始まるかわり

十二月末、園庭にたくさんのシイの実が落ちた。シイの実は乾いて食べることができるように、子どもたちは拾ったシイの実を洗い、鍋で煎ったのを楽しみに待ち、こんがりと焼けたシイの実の皮をむいて食べた。その味は、子どもたちには納得の薄い味だったかもしれない。香ばしさの中に柔かな秋の味わいが広がる。何より、自分たちが拾った実が食べられること、ということ、子どもたちの心を弾ませ、幼稚園には連日シイの実を煎る香ばしい香りが流れている。

そのようなことから、子どもたちの中から「ナーサリーの子どもたちにも食べさせてあげたい」という声が出てきた。集めたシイの実がたくさんのになったので、『みんなでパーティー』をしようか、ということになり、「明日来てくれって誘いに行こう」となった。

翌日、ナーサリーの子どもたちが山の上から下りてくると、年長組の子どもたちは煎ったばかりのシイの実をこぼそうとした。堅い皮をむいてあげたり、ナーサリーの子どもたちがシイの実を小さな口に入れるのをじっと見て見られ、運動会で踊った『よさこいソーラン』を張り切って踊ったりする姿もあった。
ナーサリーと幼稚園のかかわりに、子どもの声が
始まるということを、私たちとても大切に
している。それは、時を積み重ねる中で子どもたち
の中から自然に出てくる姿である。誘いに行こ
う、「なぜに行こう」音が子どもたち
の中で自然に出てくることが何より大切である。
春、新しく入園した子どもたちも幼稚園に慣れ始
め、園全体に少しずつ落ち着きが見られるように
なったころ、お山の上で遊んでいるとナーサリーの
建物を見つけて「あそこは誰のおうち？　」と聞かれ
ることがある。「あそこには小さいお友達がいるのよ。
いま何しているのかな？」　と答えると、子どもたち
は「ふーん」とうなずいたり、ナーサリーのドアを
そっとのぞき込んだりしていた。春は、ナーサリー
も新しいメンバーや加わる時期であり、ドアは閉じ
たままのことが多かった。
六月、幼稚園のじゃがいもパーティーにナーサリーの子どもたちを招待し、同じ時を過ごしたころから、ナーサリーのドアは、ノックできるドアに変わり、遊びに来て、一緒に遊べるようになった。いろいろな時に、ナーサリーの子どもたちのことを思い出して行動する姿が出てくるようになり、「遊びに来て」と誘うだけでなく、遊びに行きたいという声も出てくるようになった。黙って来てしまったようだから、一度先生に聞いてきたので、彼女たちに「おじよう、おじよう、ナーサリーのうちにゆき、しばらくそこで過ごしてきた」片づけを手伝ってとても感謝されたことがうれしい様子を見た。このようなかかわりを重ねる中で、楽しいうちの声が子どもたちの中から出てくるようになっただのだろうと考える。

△「皮をむいてあげるね！おいしいよ」
さまざまなやりとりの積み重ねが豊かなものになっ
た背景には、ナーサリーと幼稚園の保育者が共通の
思いをもっていたことがある。ナーサリーと幼稚園
の保育者が共通にもっている思い、それは、子ども
の自然なかかわりを大切にしよう、子どもたちの意
欲を大切に受け止めていくという思いである。
「いいのパー・ティー」のお知らせをお手にした時
に、ときは子どもたちに「いま、みんな寂しいのよ」
と呼びかけてくれた保育士の言葉からそのことがよくわかる。後で、お昼寝の
中のナーサリーに入れてもらったことのお礼を伝え
ると、保育士から「子どもたちが中に入ったそう
な顔をしていたし、きっと顔を見て誘っていたからと
思ったのよね。お昼寝中だから声はかけられないが
れど、顔は見たいかっって思って。少し変かな、と
は思ったけれど」という答えが返ってきた。子どもたちの思いを大切にしようという姿勢が共通にある

幼稚園教育要領の中に、いろいろな人とのふれあ
いを経験させていく際の留意点として「自分の生活
に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情
や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験
を通じて、これらの人々などに親しみをもち、人と
かかわることの楽しさや人との役に立つ喜びを味わう
ことができるようになること」という一文があ

いる。いづみナーサリーと附属幼稚園の間で体験され
ていることは、まさに「自分の感情や意志を表現し
ながら共に楽しみ、共感し合う体験」ではないだろ
うか。そして、そのような体験は、両方の保育者の
が、子どもたちが自分の感情を素直に表現すること
を通じて行動することを大切に支え
ていること、そして何より自然なかかわりの中で共
感し合う体験を大切にしていることによって生み出
されているのである。
お昼寝中のナーサリーは、静かな寝息に包まれ特
別の雰囲気があった。赤ちゃんの寝息を聞きながら、
そっと。お昼寝中の子どもたちの顔をのぞいた印
象は、「子どもたちの中に温かさと共に深く残ってい
くのではないだろうか。温かさの印象、いとおしい
と思う気持ち、それがナーサリーの子どもたちとの
さまざまなかわりを通じて子どもたちの中に残っ
ていくものなのだと考える。
「大学の中心で赤ちゃんが笑う」という願いのもと
で誕生したいずみナーサリーは、いま確かに大切な寝息を
立てて大学の中心にある。幼稚園の子どもたちは、
その寝息をいとしき感じ取れる近さの中で生活して
いる。「大学の中心で赤ちゃんと子どもたちが共に
笑う」という生活は、このようにしてゆっくり確かに
に積み重ねられている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）
編集後記

今月の倉橋特集のキーワードは、「うっかり」です。保育における「うっかり」の創造性といいましょうか、とても興味深く、読んでいて勇気づけられるようでした。
「ああでもない、こうでもない」の二元論の狭間でもがくのが、人間の常です。持続的なうっかり状態はそれを見えにくくし、人を颓のにしたり迷わせたりします。でも、瞬間的な「うっかり」によって、思わぬ関係性が切り拓かれたり、自分の考えを見直させてもらうりする場合も多いのでしょう。「うっかり」は効果をねらえないところが、保育現場と相性がよいのだと思います。
さて、昭和29年から平成19年までの「幼児の教育」バックナンバーがネット上で追加公開されました。このページ下のURLからアクセスできますので、どうぞ！

幼児の教育

第109巻 第7号

平成22年 7月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ・田中恭子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円（本体524円）
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙制作 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 高橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

〈特集〉倉橋からの子どもたちへの伝言

コピーゼン石子・松井とし

・緑蔭図書紹介 宮下美智代・西脇二葉

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます！
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/
へ、アクセスしてください。
明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されています。ご意見ご感想などは、youjimail@yahoo.co.jpまでお寄せください。
次世代の保育のかたち
—幼稚園・保育所の可能性と限界—
吉田正幸／編著

認定こども園のチャレンジから
保育の未来を探る！

子ども環境が大きく変貌する現代において
幼稚園・保育所に求められる機能が
変わりつつあります。
10年後にも選ばれる園で
あり続けるために
今、するべきことは何でしょうか？
認定こども園の5つのケーススタディと
イギリスやドイツなど
海外の先進的な事例より、
近未来の保育のかたちを浮き彫りにします！

21×15cm 264ページ 定価 1,890 円（税込）

Contents
はじめに
第1章 幼稚園・保育所に起きている変化
第2章 認定こども園の誕生
第3章 ケーススタディから探る保育のかたち
第4章 ヨーロッパの保育事情に学ぶ
第5章 幼稚園・保育所の未来の可能性
おわりに
参考文献

小児書のブレーバー館

くわしくはブレーバー館代理店・特約店・支店・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。
保育学研究倫理ガイドブック
—子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために—
一般社団法人 日本保育学会 倫理編集ガイドブック編集委員会／編

保育学研究の指針となる倫理ガイドブックが刊行されました。保育学研究の心得を具体的な事例や用語解説などを用いて、わかりやすく、ていねいに解説します。
保育所や幼稚園など、保育現場の実践者や園にさまざまななかたちでかかわり、研究をされている方々にお薦めします。

21×15cm 96ページ 定価 1,000円（税込）

●内容●
条文を解説＆キーワードで読み解きます
第1部 保育学研究における倫理
1. 保育学研究における倫理とは何か
2. 「日本保育学会倫理綱領」条文解説

気になるポイントを
1項目 450文字程度でコンパクトに解説
第2部 研究成果の発表と倫理
1. 研究成果の公的な場・学会での発表と倫理
2. 研究データ・資料の取り扱い上の問題
3. 引用上の問題
4. オーサーシップに関する問題
5. 論文執筆上の問題
6. 学会発表時の問題
7. その他の研究倫理上の問題

ケースごとに、2つの具体例を紹介
第3部 保育学研究の実施と倫理の事例
1. 保育実践研究の実施における倫理の枠組み
2. 倫理の事例
第4部 倫理の教育